

大塚啓二郎上席主任調査研究員インタビュー

インタビュアー：深尾京司 所長

2019年2月7日

- 深尾所長：2019年12月、日本学士院会員に選定されまして、大変おめでとうございます。我々、アジ研にとっても大変名誉なことと考えています。今日はご研究についてお話を伺い、アジ研の今後の開発研究に生かしていきたいと思っています。よろしく願いいたします。
- 大塚上席：ありがとうございます。
- 深尾：大塚さんには、現在、アジア経済研究所では、技術移転と産業発展、インドとタイにおけるオートバイ産業と自動車の比較研究をお願いしていますよね。
- 大塚：ちょっと視野を広げようと思っていて、パキスタンを加えて、それから農産物加工も事例研究に加えて科研費を申請中です。

開発経済学を志した契機

- 深尾：最初の質問ですが、そもそも開発経済学を研究されたきっかけというのは何かあるのでしょうか。
- 大塚：皆さんあまり信用してくれないんですが、私、高校ぐらいまで非常に成績の悪い子供で、うちの母が、何で啓二郎は馬鹿なんだろうといつも悩んでおりました。お母さんがそう言うんなら、きっと馬鹿に違いないと思っていて、体は強いものですから、頭を使わずに体を使う、そういう仕事はないかと高校3年のときに考え始めていました。1966年夏のことですが、不勉強とはいえ、少しは受験勉強もしていました。それで、エドウィン・ライシャワー駐日米国大使が書いた、左側が英語で右側に日本語が出ているような英語の長文読解の小論を読みました。ケネディ政権が学者を送ったんですよね。ガルブレイスをインドに送って、ライシャワーを日本に送った。両者とも非常に評判がよかった。
- 深尾：日本の封建制の論文とかを書いていましたよね、ライシャワーは。
- 大塚：本当の専門は、多分、中国経済史、中国史だと思います。奥様がハルさんという日本人で、すごく尊敬されていたと思います。
そのライシャワーさんが書いたものに、当時、多くの皆さんが思っていたことなただけど、アジアは食糧不足で飢えると、大変なことになるとあったんです。人口はものすごい勢いで伸びていて、食糧生産はほとんど伸びていなかったのです。だからばたばた人が死ぬと。これは大変なことなんで、日本の若者はこの問題を考えてほしいという内容だったんですよ。だったら農業かと、これはちょっと体力を使っても頭はなくてもよさそうだなと思って農学部で、農業技術者みたいなものを目指して北大に行ったんです。
- 深尾：ご出身は？
- 大塚：東京です。東京に適当に入れる大学がなくて、北大農学部はそれなりのバリューがありますから。
それで、そちらの方向へ行こうと思っていたんですけど、今思えば間違いだったようには思

うんだけど、食糧問題はそういう技術の問題よりも経済の問題ということをいろいろなところで読んで、そんなことをしているうちに、セオドア・シュルツ (Theodore Schultz) 先生の日本語訳でしたけど、彼がノーベル賞をとる業績になった *Transforming Traditional Agriculture* という本があるんですが、それを見て、これはおもしろい学問だなと思って、農業経済学を勉強しようと思ったのです。

そのまま北大の大学院に進めばいいかなと思ったら、こんなところ来るなという菊池真男さんという先輩がいて、それで札幌を出て日本中で行き場所探し始めました。たまたま北大の先輩が都立大の速水佑次郎先生と共同研究をしていて、都立大に連れて行かれたんですね。9月に試験があって、12月ぐらいに一橋の試験があって1月ぐらいに東大の試験があったんじゃないかな、当時。都立大の試験で練習しているつもりだったんです。ところが速水先生が、その試験が終わったら僕の部屋へ来たまえと言ったんです。そしたら、45人受けてトップで受かったと、握手してくるんですよ。私は、手を離そうとするんですけど、決して彼は離さない。

○深尾：目をつけられたわけですね。

○大塚：一橋とか東大とか言ってたけど、本当に行くのかって速水先生が言ってくるんですよ。先生の顔に、行かないでくれと書いてありましたね。そういうのに弱いものですから、いえ、先生のところで勉強しますと言ったら、手を離してくれて。後で失敗したかなと思ったんですけど、それが成功だったんですね。

速水先生は本当に傑出した大学者で、非常に厳しいというか、褒めるのが苦手な先生で、ただだめかとか、そういうのはうれしそうに言うんですよ。

陰では期待してくれていたみたいで、国際会議で農業経済学では不世出の大学者シュルツ先生に、うちに弟子がいてシカゴ大学へ出したいんだけど、力になってくれないかみたいなことをどうも言ったらしいんです。直接聞いていないので、推測を交えているんですけど。シカゴ大学は1年生に奨学金を出さず、1年生のときの成績がいいと2年から出るという奨学金のシステムでした。そうしましたらシュルツ先生が、速水教授がそれほど推すのであれば、僕がポケットマネーで奨学金を出してあげましようと言ったらしいんです。5,200ドル、シュルツ先生がシカゴ大学に寄附をされて、その寄附のお金が私の奨学金となりました。

○深尾：すごいですね。

○大塚：すごい話ですよ。

そんなぐあいでは、だから、最初はライシャワー大使の影響で農業をやろうと思って、だんだん、速水先生も経済学部におられて農業研究をおやりになっていて、シュルツ先生も経済学部の中で農業研究をやっていたから、農業経済学を選考しているような経済学を選考しているような、そんな感じのやや中途半端な研究者になりました。

○深尾：北大では、農業技術も勉強されたんですか。

○大塚：いや、本当に何も勉強していなくて、ボート部のキャプテンをやっていた、何とか全日本選手権で勝とうと。まあ、勝てなかったんですけど。当時は、実業団が弱かったので、学生は即全国でトップになったんですけど、タイム順で日本で4位でした。それぐらいまでは行ったんです。

○深尾：体力に自信があるというのは、主にボートで培ったという。

- 大塚：その前はバスケットをやっていたまして、それも真面目にやっていたので。
- 深尾：高校のときですか。
- 大塚：中学のときもやっていました。それは自信がありましたね。
- 深尾：その後、緑の革命のご研究とか、技術革新の問題とか、農業について、それから、あとアフリカの米の問題とかをされた背景には、やっぱり北大のときからの蓄積というのものもあるわけですね。
- 大塚：初心貫徹で、最初のライシャワー大使の話に多少戻せば、私がそれを読んだのは1966年、それから大学へ行き、大学院へ行き、博士号をとったのは1979年、そのときにはアジアは緑の革命で、食糧問題は解決しちゃっていたんですよ。ありゃあと思いました。それは農民のためには、あるいはアジアの人々のためにはよかったと思うんですけど、こちらとしては、やろうと思ったことはもうほぼ終わっていたので、しばらく違うことをやる羽目になりました。
- そうしたら、2000年ごろですかね、1960年代の食糧難のアジアに非常に似た状況がアフリカで生まれ、今も続いています。これは最初に思っていたことをまさにやるチャンスが到来したと思って、2000年ごろからアフリカの農業の研究を始めました。

研究スタイルの特徴

- 深尾：2番目の質問になるんですけど、研究スタイルの特徴とか、他の研究者と比べてここが特に優位性があると思われているところというのは、どんなところでしょうか。
- 大塚：これは、やっぱり速水先生の影響が強いですけど、現場主義ですね。まず現場に行く。だから、アジ研の會田さんと一緒にタイへ最初にオートバイを見に行ったときなんか、頭の中はほとんど空っぽでした。多少、文献を読んでいましたけどね。文献を読んでいたけど、ほとんど知らないところへ構わず出ていく。そこで現場の人と雑談をしながら何が起こっているのかを考える。ここは速水先生も同じだったと思うんですね。速水先生は、その後、リグレッション（回帰分析）に持っていくという意識が弱くて、真実がわかればいいというスタンスでした。私は、それを何とかリグレッションに持っていくにはどうしたらいいんだとか、どういうデータが入手可能かとか、質問票もリグレッションに欲しいようなデータが集まるような質問票をつくるか、そういうことに努力しました。それで独自のデータ収集をすることが多いですね。
- データ収集を始めるころには、結論の3分の2ぐらいわかっている。わかっていると、やっぱりいい分析結果はでない。仮説があって、その妥当性は大体事前にわかっている。そうでないといいい質問票をつくれないと私は思うんですね。
- よく現場をわかっているままで質問票をつくる人がいますが、何でも聞くものだから質問表がやたらと厚くなります。そうすると、聞かれるほうは、もう嫌になっちゃっていいかげんな答えをしてくるから、情報の質はどうしても悪くなりますね。こちらはなるべく短めの質問表でポイントだけをつかまえてくるということに努力してきました。しかし、たまには質問票が短すぎて大事なことを聞き忘れ、あっ、しまったということもあるんです。だけど、どっちがいいかといえば、やっぱり現場を理解して短めの的を射た質問票をつくるのをやるべきだと思いますね。
- 深尾：ご研究を見ていて、非常に新古典派的というか、合理的な行動、例えば*Journal of Economic*

*Literature*に速水先生と大塚さんが一緒に書かれた論文、もうほとんどテキストブックのようにみんな使っていると思いますけど、そういう新古典派的な利潤最大化、一方で不確実性とか情報の非対称性があるという、そういうことをやっぱり常に意識されているわけですか。オートバイ産業とかを例えば見に行かれても。

○大塚：そうですね。自分が話を聞きに行くんだけど、工具箱を持って出かけて行って、その中に僕が知っているミクロ経済学のツールが入っていて、どれを使って理解するかという、そういう感じのアプローチですかね。

でも、大した道具は入っていないんです。一応、のこぎりと金づちときりとか何とか、そういう基本的なものは持っている。シカゴの教育がそうだったんですね、僕らのころは特にそうだったんです。80年代になって大分変わったと聞いていますけど。

試験のときに質問が出てくるんですけど、まず、これは何を聞いているのかと考える。次にどのツールを使えるんだと考え、だったらこのツールを使えば解ける、ということになる。その訓練を非常に厳しくやってもらいましたね。だから、多分、ほかの人より道具を出すのが早いはずですよ。

それがベースだと思うんですけど、そうすると、テーマは何でもやれないことはない。金融はちょっと私、弱いので、金融をやれと言われてもシステムとか用語がわからないので、それはできないと思います。でも、例えばドイツの自動車産業の研究をしると言われれば、別に困ることはない、やればいいだけです。

そういうことがあって、農業も製造業もやるようになった。それから、アジアとアフリカ、両方ともやるようになった。いろいろ見ているというのは、計画したことじゃなくて、だんだんそうなったんですけど、自分の研究の幅を広げてくれましたね。

アジアをやってからアフリカをやったのもよかったですね。アフリカをやってからアジアだったらだめだったと思いますね。

○深尾：どうしてだめなんですか。

○大塚：アジアはアフリカの未来という面がかなりあるので、未来の国から現代へ行けば、これから何が起るかわかりやすい。最初からアフリカをやっていて、アフリカで学んだものをアジアで生かすものがあるかという、余りないんじゃないか。

○深尾：その意味で、アジアの前に、日本もアジアの一部ですけど、日本のご研究もあると思うんですけど。日本が先行していて、それがアジア、アフリカという感じはありますか。

○大塚：ありますね。非常にありますね、それは。

○深尾：それは、アメリカとかヨーロッパとか、もっと早く経済発展した国と比べて、違う、特殊なものですか。

○大塚：アメリカなんかも19世紀などをちゃんと勉強すれば、似たような話になるんでしょうね。

○深尾：適用できるはずだと。

○大塚：初めて1979年、イェール大学のPostdoctoral fellowになったんですが、建物がすばらしいなと思って感激しました。その後、オックスフォードへ行ったら、何だ、完全に真似じゃないかとわかりました。

そういう話をアメリカの学者なんかにすると、そんな事情だったというようなことを言います。もちろんドイツだってそういうことしたわけだし、ガーシェンクロンなんかもそういう話

をしているわけだから、非常に似たことが起こっていたと思います。

国民性からいくと、日本人の国民性って、私は国際的だと思っているんですよね。アメリカ人なんかのほうが非国際的であって、日本からずっとアフリカまでは結構同じような考え、ちょっとウエットな面がある。多少は違うけど、でも、やっぱりアフリカなんかでは日本人、評価高いですよね。日本人は信用できるとか、あいつらはいいやつだとか。少し前にパキスタンへ行ったんですけど、パキスタンでもやっぱり日本人には一目置いていますよね、だから、日本的なパターンで行動していれば非常にうまくいく。

○深尾：日本的なパターンで、長期的な関係を。

○大塚：長期的な関係、人のことを思いやるとか考えてあげるとか、上から目線じゃなくて。

○深尾：アメリカはもうちょっとドライで、ベストを尽くすような感じで。

○大塚：言葉ではとてもかなわないけど、彼らよりはうまく国際共同研究ができるなど自分で思います。

○深尾：そういうことでいったら、北ヨーロッパ、オランダとかイギリスとかもどっちかというところとアメリカに近くないですか。

○大塚：そうですね。ノルウェー人とかスウェーデン人のほうが、うまくやれるかもしれないですね。もう少しソフトな感じがしますね。

僕は、小学校の級長さんの選挙があると、2位か3位で落選なんですよね。でも5人、10人のクラブみたいのところへ行くと、必ず主将になるんですね。だから、小さな組織のリーダーをするのは得意なのかもしれない。

○深尾：共同研究とか。

○大塚：10人ぐらいの共同研究をやる。わりと、一人一人のことを考えて、リアクション・ファンクション（反応関数）を考えて、この人、こういう性格だからどうのこうのというようなことも気にしながらやる。でも、100人もいたら、そういうこと気にできないですから。

○深尾：でも、いろんな学会の会長をされたり、あと、editorial boardを率いたり。エディターはそんなに人数多くないですかね。でも、学会は結構人数が多いでしょう。

○大塚：国際農業経済学会の会長は、特に向いていたわけじゃないけど、多くの人が私を推し、日本人、大体そういうことに恥ずかしがって出ないから、選挙に勝てるなど自分でも思ったので出ました。

IRRI(International Rice Research Institute 国際稲研究所)の理事長というほうが大変でした。IRRIというのは米の高収量品種をつかってアジアの緑の革命という、米の大増産をやった一番の中心地なんですけど、北大OBは非常に頑張ったんですね。その中で、木原均さんという有名な遺伝学者がいて、三島の遺伝研究所を創ったりとか、北大出身者で北大が最も誇る大学で、彼が最初の理事だったんですね。それが頭にあって、大塚さん、理事やりませんかと言われたから、それは光栄だと思って理事を引き受けました。理事ならそんな大したことないんですけど、ちょっとアクシデントで理事長をやっちゃったので、あれは大変でした。速水先生に怒鳴られてね。

○深尾：どうしてですか。

○大塚：ばかやろうみたいな。君は研究すると言ったけど、研究をする気はないのかと。すぐに返事をして断われと。あれはまいりましたね。すごくどなるんですもの。

○深尾：都立大にいらっしゃるときだったんですか。

○大塚：2004年から2007年が理事長なので、GRIPS（政策研究大学院大学）ですね。1日の3分の1くらい時間をとられました。

そのかわり、私、今でも速水先生が間違いで、私が正しいと思っています。IRRIというのはアジアで活動してきたんですね、インターナショナルといいながら。アフリカにはほかの米の研究所があるんですけど、これはまただめなんですね。だから、IRRIをアフリカに出したかったんです。それをかなり一生懸命やって、出すと同時に、JICAに働きかけて、稲作振興プログラムを立ち上げてもらって、それに加えてアフリカの農村調査を始めた。調査をしているうちに本当に大変革が起こって、すごいデータをとっちゃうというのが当初のもくろみだったんです。思ったほど「緑の革命」が進んでいかないんですけど、でも、徐々に進んでいる。だから、IRRIに行ってもらって、あるいは、世銀を説得してお金を出してもらって、片やJICAからお金をもらって調査して、全部やっちゃうということができたのは、あの理事長をやったおかげで、そういう意味では、トータルではよかったと私は思っています。

○深尾：アフリカで緑の革命がなかなか成功しないというのは、例えば水のような天然資源の問題なんでしょうか。でも、水が足りなくても育つ稲とか、そういうのもたしか研究されていたと思うんですけど、それとも、土地制度とか教育制度とか、そういう制度の問題なのですか。

○大塚：現象的にいえば、基本的な栽培技術、技術というよりは栽培方法の問題なのかな。例えばアジアでは水田の定義というのは、畔がある、それで水がためられる農地のことです。アフリカに行ったら畔がない田んぼってたくさんあるですよ。窪地みたいなところに水をためてそこで稲作をやっている。全然データがないのでわかりませんが、3分の1ぐらいの水田は畦がないんじゃないかな、田んぼのはずなのに。畦が最も基本で、その後、平らにするということが非常に大事なんですけど、平らにしているところなんて、本当にほとんどない。次に田植えをするときに真っすぐ植える、等間隔になんていうのは、もう本当に全然ない。それを教え込んでいるところは別ですよ。それは1割にもとても満たない。

アジアで緑の革命が起こったときに、これは言い換えればseed-fertilizer revolutionだと、種-化学肥料の革命、新しい種と化学肥料の投入によってもたらされたと言った人がいて、今でもそう思っている人がほとんどじゃないかなと思うんですね。ところが、アジアは、この辺から想像もかなり入るんですけど、やっぱり長い米生産の伝統があって、土地が狭いですから割と丁寧に土地を使わなきゃいけないという意識があって、畔はもちろんつくる。60年代に畔のない田んぼ、アジアにはなかったと思いますね。均平化もびしっとやっているかというのと、それはしていなかったみたいだけど、そこそこ平らにしていた。それから直播をするにしても、間隔とか少しは考えていた。そこへ新しい種と肥料が入ったんで、seed-fertilizer revolutionでも間違いではなかったのかなと。

ところがアフリカは、基本的なことができていないところに肥料と種が入ろうとするから、入ってもやっぱり余り効果がないんですよ。多くの人々がそこをなかなかわかってくれないんだと、私は思っています。だから、簡単にいえば、栽培技術を普及すればいい。普及をうまくやれば緑の革命が起こりますね。

○深尾：ベーシックな技術を含めて普及をしていくということですね。

○大塚：ええ。最初から私、米を推しているわけじゃなくて、最初はトウモロコシに着目してい

たんです。トウモロコシが一番大事な主食なものですから、トウモロコシをやろうと思ったんですけど、米がうまくいっているところは本当にうまくいっているんですね。というのは、米というのは、技術の移転可能性が非常に高く、フィリピンで非常にうまく育つ稲は、アフリカのどこへ行ってもうまく育つんですよ。じゃあフィリピンで非常にうまく育つトウモロコシの種を持っていったらどうかと、これ、だめなんですね。トウモロコシのほうが地域特性が強いんですね。

だから、アジアでやっていることを基本的にそのまま種も含めて、持っていけばいいと私は強く主張しているんです。種はもちろん現地の品種と掛け合わせたりしていろいろ環境適用可能性を高めていけばもっとよくなると思いますけど。なかなかもうひとつ、多くの人を説得し切れてなくて。徐々には変わってきているかなと思うんですが。

○深尾：ちょっと話を戻しますと、ミクロ経済学の工具箱があって、実際、例えばタイのオートバイ産業を見に行かれて、ここが例えば発展の肝だとか、仮説を立てられて、また発展を阻害している要因だとかを立てられて、調査をされて、リグレーションされるということを受け、例えば、タイの場合、今ご研究中なんで、まだ秘密かもしれませんが。

○大塚：いや、そんな秘密はないです。

○深尾：何か最近実際に行かれて、これが例えば発展のキーになっているとか、妨げになっているとか、例えばほかの国と違う点だとか、思いつかれたことは何かありますか。工具箱から引き出す具体例を知りたいんですけど。過去のご研究でも。

○大塚：過去の研究で一番わかりやすいのは、オートバイでもいいんですけど、ガーナのココアの研究をしたことがあるんですね。ココアの木というのは、この天井ぐらいの高さで、影を好むものですから、シェードツリーといって影をつくる大きな木を植えている、だからココア畑は林のような景色なんですね。

行く前に文献を読んでいくと、土地が共同所有になっている、つまり、部族の共同所有みたいな、村全体で所有していることが問題になっている。そうすると、木を植えてココアができたとしても、ほかの作物でも何でもいいんですけど、収穫できたとしてもみんなで分けちゃうから、せっかく汗を流してココアの木を育てて実がなったと思ったら、ほかの人にとられちゃう。したがってインセンティブがないので、木は植えないいろいろな文献に書いてあるんです。

初めて行ったものですから、ココアの林と普通の林が、私、見分けがつかなくて、これはすごい、木がたくさんはえていると感動しました。聞いたら、これがココアの畑だと、すごいなと思いました。全部もうココアだらけですよ。読んだことと全然違うわけですよ。

それで話を聞いてみると、土地所有の個人化はある程度している。しているけど、私が土地を今使っていたとして、私が死ぬと使用権は私の弟に行くか、妹の息子に行くんですよ。ココアの林づくりは大変で、奥さんも手伝うんですね。でも、奥さんとしては、おやじが死んじゃったら、全然関係のない人のところに土地の使用権が行っちゃうわけですね。奥さんが手伝うインセンティブがない。でも一生懸命手伝っていると言うんですよ。おかしいな、理屈と全然合わないでしょう。

でも、何か絶対に理由があるはずだと、一生懸命質問しているんだけど、私が何を質問して

いるのか通訳の人は理解してくれなくて、3週間ぐらい同じ質問をずっとやっていて、そうしたら、ギフトという言葉が出てきた。何それって言ったら、奥さんが非常によく手伝ってココアのエリンゴ林をつくった場合には、親族会議を開いて奥さんに土地をあげるという制度があると。その地域は、もともとのシステムでいけば、男しか土地を持っていないはずなのに、最後に調べたのだと、大体3分の1の土地が女性の所有になっていた。それなんか、余りにも単純なんだけど、投資の報酬の話ですよ。絶対、投資の報酬がなければ木を植えるわけではないと、何かあるはずだと。

○深尾：納得できるまで。

○大塚：やっていた、しつこく質問をやっていました。本当に一番単純な道具箱からだったけど、でも、それは絶対、経済学の本当に基本中の基本、それが正しくないわけではないと。私は、いい研究だったと思いますね。

自動車でいえば、インフォメーション・スピルオーバーが重要であると盛んに言っているんですよ。インフォメーションが、空気伝染のように伝わってくるかのごとく言っているんですけど、いや、そんなのほとんどなさそうです。まあ詳細は、表に出ないですけどね。

でも、例えばホンダにしろトヨタにしろ、下請に教えて、どこまで幾らとっているかは聞けなかったけど、料金もとっているんですね、トレーニングのために。それから、その下請の連中も、もちろんそうやって教わるんですけど、それ以外に日本人をアドバイザーを雇っているんですね。この間、インドに行ったら、インドも結構やっていましたね。日本人をアドバイザーに雇っていてすごい高給を支払っているんですよ。

○深尾：中国の広州ホンダに、僕が行ったときには、ホンダのサプライヤーであるプラスチックのバンパーを作る台湾資本の工場に、前にホンダで働いていた人が行って、確かにそっちで給料をもらって、ホンダがオーケー出して技術を教えている、金型の維持ですね、プラスチックの金型の維持管理。

○大塚：それは、もう電気でも何でも、ものすごい数の日本人が雇われたんじゃないですか中国で。

だから、こういう実態の話が全くなくてスピルオーバーと言われても、そうじゃないだろうと思っちゃいます。すごい高給でしたよね。幾らか覚えていないけど、タイでリタイアした人たちの雇われている給与は日本よりも高給でしたね。

○深尾：そうですね。毎日来ているわけではないけれども、かなりの金額をもらっていると。

○大塚：日本の二、三倍の感じだったんじゃないかと、僕、思うんですけどね。インフォメーション・スピルオーバーというよりも、これは本当にマーケット・メカニズムですよ。それだって、余剰が出るわけだから。

○深尾：お互いにインセンティブがあるわけですね。

印象に残る自分の業績

○深尾：では3番目の質問で、今のお話で大分含まれている気もしますが、エウレカというか大発見というか、今までされた業績の中で一番印象に残っているものは？

○大塚：大発見はないんですけど、「Journal of Economic Literature」のシェア・テナンシー（刈分小作制）の話ですよ。それは、10年ぐらいかけたんですよ。あれメインの仕事じゃなかつ

たんです、常にメインの仕事があって、いつもサブでやっていたんですね。研究者がみんな間違っているんですよ。

○深尾：先行研究が。

○大塚：ええ。

○深尾：すごい注意深い書き方をしていますよね。最初にデータが持ってきてあって、モデルの前提になるようなところの。

○大塚：モデルの前に状況説明を少しね。

○深尾：それから、かなり一般的なモデルがあって。

○大塚：そう、モデルと現実の、厳密なすり合わせもやる。

今からもう一回やれといたら、多分、やらないと思うんですよ。一つは、やっぱり速水さんも人が悪かったな。やめたらどうとは言わなかった、にこにこ見ていたんだけど。クリティカル・レビューなんで、レフリーがみんな批判されているわけですよ。アメリカ人、ちょっとでも批判されるとかっとなる人が多いから、最後はトータルで6人か7人レフリーがついたんですよ。大体のレフリーが批判されているから、落としにかかっているわけです。普通だったら落ちるわけですよ、もちろん。そうしたら、ジョン・ペンキャベルという当時の *Journal of Economic Literature* のエディター、スタンフォードの労働経済学の先生が読んでくれたんですね。丁寧に原稿を読んでくれて、レフリーのコメントと比べてくれて、レフリーの言っているのは全くおかしいと。で、採択してくれたんですね。

今、Foreign Direct Investment (FDI：外国直接投資) 関連の既存研究も、ある意味ではほとんどおかしい。僕、深尾さんのはよかったと思っているわけですよ。悪いのが非常に多くて、ひど過ぎる。クリティカル・レビューの論文を準備して投稿しているものだから、ぶつかっちゃうんですよ、レフリーに。

○深尾：*Journal of Economic Literature* の論文は92年ですか。80年代末ぐらいから情報の非対称性とか、いろんな研究が出始めて。

○大塚：エージェンシー理論が。

○深尾：ええ。コントラクトのエフィシエンシーとか、そういうのを前提に、農業を研究されて既存のを全部ぬり変えるようなことを目指されたということですね。

○大塚：そうですね、あのときは。

○深尾：それも結構前から、発表される前からずっと努力されて。

○大塚：速水さんがやれというから、しょうがなく始めたんです。

○深尾：いつごろ始められたんですか。

○大塚：81年ぐらいですかね。彼がフィリピンから帰ってきて本のドラフトをつくっていて、これを読めと、コメントしろというから、いや、非常におもしろいけど、理論がありませんねと言ったら、かあっと彼は怒って、じゃあ君がつくれと。何をつくったらいいんですかとたずねたら、シェア・テナンシー（分益小作）を勉強しろと言われた。

やってみたら同じような前提で始まるんだけど、なんだか結論が随分違ったりして、妙な分野だなと。そのうちやっていたらよくわかってきた。

かなり良いジャーナルに出る論文は、シェア・テナンシーは非効率でだめな制度だと主張し

ている。だめだという論文は出るんですけどね、いいところに。

シェア・テナンシーもちゃんと効率的に機能しているという論文は、例えば、*Pakistan Development Review*といったローカルな雑誌に出ている、そういうのも全部拾ってきて見ると、良いジャーナルに出ているのが異常で、それはそれなりの事情があって異常になっているというがわかる実証研究になってきた。私としては、理論と実証の対話をやろうとしていたので、非常にありがたいテーマでしたね。

でも、ペンキャベル先生がいなければ悲惨なことになりましたね。それから、リテラチャー・レビューの怖いところは、ほかの人が論文を出しちゃう可能性があることです。怖いですよ。FDIの研究は割とスピードを持ってやったので、そんな怖くありませんでした。このレビュー論文は怖かったですね。どこかでばんと新たな論文を出されちゃったら、今までの苦労は水の泡になっちゃうわけだから。そういう意味で非常にツイていました。

あと、その前に、初めてアジアで調査したのは82年なんですけど、フィリピンのジブニーの研究というのがありますよ。ジブニーというのは乗り合い自動車というか、タクシーとバスの中間みたいな、一応路線はあって、料金は距離に比例していて、しかしちょっと余計に払えば家まで来てくれるとか、タクシーみたいな面もある。あれが農業のシステムに非常に似ていて、シェア・テナンシーというか歩合制、3分の2がドライバー、3分の1がオーナー、その研究をしたんですね。

そうしたら、シェア・テナンシーとほとんど同じストーリーなんです。伊藤元重さんがジブニーの研究が好きで、よく引用してくれていました。あれがもう少し派手なテーマだったら、もうちょっといい国際雑誌に出たでしょうね。自分としては意味のある研究だったと思っています。

今後の研究

○深尾：4番目に、今後されたいことについてお聞きします。学士院会員というのも結構忙しいと、聞いていますが、その学士院会員としての職責も含めて、今後されたいこと。それから、開発経済学の今後、先ほどシカゴ大でも80年代からもう変わったというお話をされましたけど、現状とか開発経済学の今後、それと関連してアジ研が目指すべき方向性あたりについてちょっとお話をお願いします。

○大塚：自分の研究は、競馬なのか陸上なのかはわからないけど、最終コーナーを回ったところですね。さすがに、もうあと何十年できるわけじゃないから、集大成に入ろうと。會田さんとやっている自動車等々が最後のプロジェクトのつもりです。まとめに入る。一番は、集大成の単著の英語の本を書こうと思っています。

農業については、大きくいうと2種類あって、穀物の増産みたいな話と、今、非常に話題になっているのは栄養と健康という話で、米ばかり食べていても健康になれない、ビタミンが豊富な野菜とか果物とか牛乳とか、そういうところへシフトしていく必要があるという議論があって、今、それもやっているんですね。

製造業のほうで、発展のエンジンになっているのは、一つは集積のメリット。それが産業発展を後押ししている。それは園部哲史さん（GRIPS）と98年以来研究しているので、もうすっかり飽きちゃって、二人ともやる気はないんだけど。もう一つ、研究を始めているのがFDIの役

割。この四つについて発展戦略を語るという本を書きたいんですね。

この高付加価値農産物ですが、その発展はFDIとほとんど同じ話なのです。というのは、FDIは結局下請の話なんですよね。ホンダが出て行って、さっとホンダの技術をまねされてホンダのようなオートバイが走っちゃうということはない、中国だと多少あったけど。技術の移転プロセスとしては、下請企業に新しい知識が伝わって、その企業が勉強してきて、それで地元の企業とまた下につながって、それでだんだん力をつけていくような感じだと思うんですね。高付加価値農産物というのも実は、例えばスーパーマーケットが出てきて、契約栽培と称してインプットを出して、クレジットを出して、つくり方を教えて、買ってきて、要するに下請なんですよ。同じパターンなのですね。例えばオレンジの輸出であれば、ここにバックハウスといって、洗って、乾かして、消毒して、それからグレードをつけて、パッキングするような工場があるんですね。それは集積しているんですよ。

海外直接投資もかなり集積していますね。ものすごく似た話を全く別々であるかのごとく、皆さんお話ししているので、いや、基本的には同じですよと言いたいんです。従って開発戦略も似たようなものですよという感じの本を書きたいんです。

それが今後の目的だけど、それ以外、會田さんとの仕事も本になったらいいなと思うし、あと、グリーンレボリューションの話で、アフリカで2008年ごろからパネルデータを今つくっているの、7カ国ぐらいつくっているのかな、それはやっぱり編書ですけど、完成してみたいです。

あと、家内が日本経済史の専門で、経済史というのは貧乏な時期からある程度豊かになる時期まで見ている。僕は一時点でアフリカのように貧しいところから東アジアのようにずっと豊かなところを見ているわけですが、話の中味は同じなんで、いろいろお互いの研究に口を出しているわけですけども、彼女中心で私が入って、1回ぐらいは共著書を書いてみたいです。

○深尾：主に日本経済史。

○大塚：そうですね。それは、彼女に書いてもらっておんぶしてもらい感じですね。それもできたらやってみたいなというところですね。

開発経済学の今後

○深尾：開発経済学のスタイルは、昔のシカゴ流から今と変わっていて、今後どういうふうになりますか。

○大塚：どうなのでしょう。昨日高橋和志君（上智大学）と話をしたら、最近の技術普及の話の流行は、普及するとお金がもらえるようなシステムであったほうが良いということらしいです。普及員に対してそういうことをやるのはいいけど、村人同士でもそういうふうにしたほうが良いと実験室の研究では出ていると言うんだけど、そんなばかなことはあるかと思うんです。だって、例えば、一橋大学に行って、ちょっと、今、推定しているんだけど、優れた推定方法を教えてくれと言ったら、じゃあ3,000円取られるとか、そういう社会が良い社会であるわけではない。

だから、僕的に言わせれば、今後を予想するのはとても難しく、ただ、なっほしいというのは、やはり現実と理論を対話させるような研究です。もう一ついえば、常識かな。僕の使っている経済理論なんかは、かなり常識に近いわけですけど、フリードマンが、*Essays in Positive Economics*、日本語でいうとpositive economicsってどう訳すのかな、実証経済学という感じで

もないので、何というのですかね。現実の経済分析とかいうんですかね。

経済学ではいろんな理論、新しい理論が出てきて、生まれて死んでいく。残っていくやつもいる。何でそれが決まっているかという、自分の常識に照らして、これはいいアイデアだと、これはすごいということを受け入れられるのですね。それは例えばアカロフ(George Akerlof)なんかが言ったことなんかそうですよね。推定が出てきて、彼のレモンの理論は正しいというんじゃないくて、これはそうだろうと、みんなでよく考えてみると納得して正しいという感じになるわけでしょう。そういうものだとフリードマンは言っています。当時に比べれば、エコノメトリックスの推定の正確さも上がっているでしょうから、あのころよりは実証研究も重視されていいと思うけれども、やっぱり常識というのはあると思うんですよね。

常識、現実、理論、そこをやっぱり対話していかないと。今、開発経済学で一番いいジャーナルは*Journal of Development Economics*だと思いますけど、非常に理論優先で、読む気もしないし、信用する気もしないですね。

○深尾：専門化し過ぎているということですかね、実証は実証で実験をやるとか。

○大塚：現場を見ていないと思うんです。現場を見ていないというのは決定的に悪いと思う。だから、どこかで揺れ戻しが来ると思うんですよね。来なきゃ困ると思う。あれじゃあ、幾ら解析だけやっても、途上国の経済が潤うことはないと思いますよ。だって余りにも当たり前の、例えば、グラミンバンクで5人組つくって、担保もない人たちがお金を借りられる、共同責任で。担保はみんな持っていない、貧乏だから。しかし、共同責任という形をとることによって担保がわりになって、お金が借りられると、そういう話ですよ。そうしたら豊かになるというんだけど、私は最初からなるとは思わなかったです。常識で考えてたら、金だけで解決されるような問題というのはあり得ない。

うちの子供が困ったら、じゃあパパがお金をあげるよといったら、うまく子供が育つか、絶対そんなことはない。もっと悪くなるね、きっと。

やっぱり僕はやっぱり人材というか、人的資本なくして何をやってもだめだと思います。結局、グラミンバンクはそうやってお金を貸したんだけど、それによって貧困が大幅に減ったということはないということが今の結論でしょう。それはそうだと思いますよ、最初から。

もう一つのBRACというバングラデシュにあるNGOは、手に職をつけるとか、お金を貸す以外の活動をしているんですよ。それは正しいと思いますよね。金だけで解決できるとはとても思えない。

そういうときに、常識を使えない人が余りにも多い。私の常識が変わっているのかもしれないけど。だから、もう少し現実を常識を使って見る。理論と常識は本当にオーバーラップしているところがあると思うんですけどね。それと現実をあわせれば、そんな難しいことを言わなくても、何が起きているか大体のことはわかるので、そういう方向にもう少し行かないと、学問としての価値が薄れるんじゃないかと思います。

特に、実学的な問題でしょう、開発経済学って。現在の研究の潮流を見ていて、到底役に立つとは思わない。もちろん、RCT(ランダム化比較試験)なんかをうまく使えば、とても有効なツールですばらしいと思うけど、でも、RCTを使えるからやみくもにどんどん使っているような雰囲気があって、ちょっと現実軽視も甚だしいという感じがしますね。

クリス・ウドリー (Christopher Udry) という優れた学者がいて、以前イェール大学にいて、今はノースウエスタン大学ですが、彼なんかは現実も理論も計量もという三拍子そろった人です。残念ながら、あの人、アドミニストレーションの能力が高くて、若くしてイェール大学 Economic Growth Centerの所長になり、以前に、僕が会ったら、所長を終わったよと、すごくうれしそうな顔をしていたんです。でも1週間後ぐらいにほかからニュースが来て、彼が Department of Economicsの学部長になってしまって、もっと忙しくなったんです。ああいう人が少ないのが問題ですね。そういう人が少なかったら、得意技の違う人が何人かで組めばいいんですけどね。

最後に、アジ研の話をしましょう。

アジ研への提言

○深尾：どうしたらいい研究ができるか。

○大塚：やっぱりパブリケーション（国際的雑誌での論文掲載）重視ですよ。パブリケーションでうんと待遇に差をつける。そうしたら動き始めると思う。つまり、アジ研には現場をよく知っている方が随分いるわけです。そこに會田さんみたいに理論と計量ができる人もいます。そういう状況のときに、パブリケーションがないと、給料はめちゃくちゃ下がっちゃうし、研究費がつかないし、研究もできないようにする。片や業績を上げれば研究費はつくし、給料は上がるしというようなことになれば、必死にパブリケーションにとり組むと思うんですよ。

一つのカルチャーとして、これだけの世帯になっているから難しいのかもしれないけど、セミナーなんかの出席率が悪過ぎますね。お互いに研究の質を高めあうという意識が乏しいですね。

○深尾：それぞれの研究が小さくなっちゃいますね、セミナーでも、確かに。

○大塚：パブリケーション・オリエンテッドでもっと厳しくやったら、セミナーにもっと出席するようになるでしょう。

いずれにしろ、私は、もっとコラボレーションがあってしかるべきだと思います。それを誘因するにはパブリケーション重視。パブリケーションって、最近、私も投稿した論文がよく落ちるんで、本当に嫌なことだと思っているんです。辛いし、大変だし、決して愉快なものじゃないからやりたくないというのはわかります。でもやっぱり研究者の仕事というのは、大きく言えばやっぱりグローバル・パブリックグッドに貢献することでしょう。人類のための何とかという話が大き過ぎるけど、しかし、我々の持っている知識のプールを大きくすることに貢献しなければならない。だから、そう思えばやっぱりパブリケーションしていないということは、それに貢献していないということだから、研究者としてほとんど存在価値がないということになる。辛いけれども、これは頑張るしかないと思いますね。

もう一つ、今、研究費が減っちゃっているから難しいかもしれないけれど、これは白石前所長にも申し上げたけど、やっぱりアジ研独自のパネルデータをつくるべきですよ。今は、ほぼ公平に研究費を配分しておられると思うんだけど、相談して、例えばこの三つについては優先配分とてにかく調査をすとか、今年はこのAというプロジェクトでやって、来年はB、再来年はCで、その翌年はまたAでと、パネルデータを構築していくべきです。

○深尾：フィリピンの速水村みたいに、例えばある地域の家計の、労働者の動きをずっと長く、

10年とか20年とる、企業についてそういうことをやると、そういう感じですか。

○大塚：そうそう。皆さん関心がそれぞれあるだろうから、テーマはそこで決めればいいでしょう。1990年ごろにはパネルデータが大事だというのは、経済学者は認識していたと思うんですよ。もしそのときに、アジ研で先見の明のある経済学者がリーダーシップを発揮していれば、パネルデータの構築を開始できたと思いますよね。今、もし、僕のさっきの例のような感じで、3年に1度やったとしたら、8回か9回やっているわけでしょう。サンプルサイズ300ぐらいで8回か9回、非常に大事なところをばっと押さえてやれていたはずですよ。やっていたとすれば、アジ研は一挙に世界的に著名な研究所になっていたと思いますよ。

それもデータをオープンにしてあげて。使いたい研究者には少しタイムラグを置くにしても、使わせるようにしたらいいでしょう。今、お金がないけれども、遅くはないでしょう。僕はGRIPSでどれだけのどういう貢献があったかはわからないけど、一つケニアとウガンダでRePEAT Surveysといって農家を1,000軒弱なんですけど、調査を始めて、あれは私がお土産で残したことで、2003年ごろからかな。だからもう5回ぐらいはやっているんで、途中でデータを世銀に貸してあげたりとか、博士論文を書いたりした人が何人もいます。すごい数じゃないけど、海外の人も見せてくれというのであげたりしたことがあるんですけど、ああいうのはパネルデータはやっぱり持っているべきでしょうね。

○深尾：アジ研パネル。

○大塚：お金がないから3カ所はきついかもしれないけど。

○深尾：アジ研では、次の中期計画で重点研究を決めていこうということは計画していますので、いただいたご提案を……。

○大塚：それはもうずっとやるんだ、という決意が重要です。

○深尾：20年、30年やるということですね。

○大塚：私の場合はとにかくリピートするという意味を込めてやりました。重点を決めるときにパネルデータということ念頭に置いて、5年、10年の計画、それ以上でもやるというパースペクティブを持つべきじゃないですかね。それは、皆さんが興味あることでやればいい。すみません、アジ研については文句ばかり言っていて。

○深尾：いえ、大変、助かります。

○大塚：でも、アジ研にはいろいろのことをよくご存じの方たちはたくさんおられるというふうに私は理解していて、もったいないなと思っています。

アジ研の知識を世界共通の財産にすべきだと思うし、そのためには、アジ研の英文機関紙 *The Developing Economies* をもう少し改造してもいいような気がします。ディスクリプティブな分析をもっと積極的に載せて、そういう論文でもすぐにパブリッシュできるようにする。そうでなければ、テクニクに強い人と組んで論文を投稿するとか。

とにかくパブリケーションはもっと重視すべきだと思います。それは大学もそうですよね。大学は、昔に比べたらだいぶよくなりましたね。

○深尾：そうですね。

○大塚：僕だってもう70歳だから、70歳で国立大学やアジ研で職を得ているなんて昔は考えられなかった。私はパブリケーション、比較的多いから、その恩恵で、今、職を得られて大変あり

がたいですね。

そういうことがもっとももっと増えるんでしょうね、これから。ああいう年寄りを採用したらえらい目に遭う、そんなことがないように頑張るつもりでいますけど。頑張るといふか、研究が好きなので、するなと言われたほうがよっぽどつらいです。

○深尾：今後ともアジ研でもぜひよろしくをお願いします。

○大塚：一つだけお伝えしておけば、白石前所長が僕にアジ研に来てくれという話をしたときに、「一つだけやってくれればいいよ、一つだけ大きな仕事をやってくれ」と言ったんです。それが最初から僕の頭にあって。直接投資はそれなりのインパクトのある研究にしたいと思っています。これまでのこの分野の研究があまりにもひどくて、あれは本当に経済学の中でも最悪の分野(?)じゃないかな。

○深尾：取引経路のデータって、外国にそもそもあまりないですよ。

○大塚：ないですね。

○深尾：日本は特別に、東京商工リサーチとかがきいていて、それが企業信用と重なっているようなところがありますけど、国際的にはそういうものがそもそもないっていうのがありますよね。

○大塚：今年についてだけだったらけっこう情報が集まるかもしれないけど、もう少しヒストリーのあるもの、過去の話となると難しい。ところが、どこまで信用できるのか分からないけど、インドでは、自動車の部品だけなんですけど、ACMA (Automotive Component Manufacturers Association of India) という部品工業組合みたいなところがあって、そこがディレクトリーを出していて、1980年代は社長の名前と住所と電話番号で本当に電話帳だった。90年代くらいになってきたら従業員数とかね、90年代終わりくらいになってきたら取引相手とかね、貴重な情報が含まれるようになってきたので役に立ちそうです。

○深尾：そうですね、部品メーカー側の宣伝情報としてはありますよね。

○大塚：どこまで正確にカバーしているかはともかく、相当貴重なデータがあります。そのかわり、深尾さんがお得意のTFP (全要素生産性) が測れたりできないデータなんです。

○深尾：でも、どこが生き残ったとか、そういうことはできますよね。

○大塚：それはまあ、あんまりはつぶれてはいない気がするんですけど。この頃はこのくらいの規模だったのに、ホンダと組んだらこうなった、とかそういうことは分かる。因果関係は難しいかもしれないけど、こういう経緯でこうなったみたいなことはかなり分かるんじゃないかなと思いますね。あれも、「絶対データが欲しい」という強い欲望が見つかることを可能にしたような気はします。「ああ、だめかな」なんて弱気が出るなかで、「ああ、もっと頑張らなきゃ。ああ、こんなのあった！」そんな感じでしたね。タイはもうひとつうまくいってないので自ら調査せざるをえないということになったんですけど。でも、データの入手としては、非常に幸運ですよ。

○深尾：インドについてですね。

○大塚：ええ、インド。タイについてもいろいろ協力的な人はいますしね。時間がかかりますね。でも、おもしろい研究になると思うんです。しかし、ジャーナルに出すとね、レフリーはほとんどこちらが批判している連中だから(笑) 苦戦かな。あれはけっこう大変だなと思います。

○深尾：ご研究楽しみにしています。

- 大塚：はい。一回、どっかで聞いてみてください。
- 深尾：どうもありがとうございました。

本稿の内容及び意見は執筆者個人に属し、日本貿易振興機構あるいはアジア経済研究所の公式意見を示すものではありません。